書籍の構造から見た冊子の発生と折本の位相について

森　縣

はじめに

東洋の書籍装幀史に於いて、書籍は巻子（巻き物）に始まり、ひもとくに不便にして折本が工夫され、その後、折り目の裂れ易い折本をみて冊子が発見されたとするのが、今日、定説になっている。確かに巻子の長い料紙を折り畳むことは思い付いて極めて容易である様に見える。しかし、もしそうであるなら、何故、既に紀元前後に折り易い紙を得ながら、折本が発生したとされる唐代まで凡そ七百年、不便をかこちながら巻子を折り畳み得なかったのであろうか。また、これは日本の場合であるが、冊子の遺例は既に九世紀初頭から存在して、何故、折本のそれは十二世紀まで降るのであろうか。筆者はその間の事情を次の様に考えた。

八世紀の印刷術の発見を契機に、先ず巻子から冊子が発見され、その冊子の構造をみて工夫された装幀が折本であったと推定する。即ち古代書籍装幀史は、巻子からその形態を変革して冊子時代に進歩し、初期蝴蝶装期の途中で折本が工夫されたのであり、折本装幀は巻子及び冊子の両時代の間に割って入いる、その独立した装幀の時代を持たなかったと考える。

書籍の装幀としては今日、冊子形態が常識であるが、古代にあって、巻子の状態から冊子または折本を発見することは書籍装幀史上、最も大きな構造変革が要求されて容易ではなかったと考える。古代の書籍は、文書時代から続いて、その素材をつなげて固定するか（簡牘、帛書、パピルス）、或いは固定せずに素材のままに従っていた（粘土板、貝多羅葉）。後者はその後の書籍の発展史につながらずに終焉したが、書籍の形態に適う前者の巻く形から冊子が発生した。その後、東洋では折ることを可能にして書籍にとって最高の素材である紙の発見も書籍の形態変革を呼ばず、それは印刷術の発見まで持ち越された。書籍装幀の変革には先ずその構造を変えて内部徴候がなければならないが、長く続いた巻子の構造変革をもたらしめたのは印刷術発見を除いてほかになかった。折本は蝴蝶装[1]版本料紙の、匡郭と版心とで区切られた区欄（コラム）を見て、

巻子利用の便宜を思い付いて発見された装幀であると考える。

以上、冊子の発生並びに折本の位相に関わる仮説は、今それを証明する確かな証拠を挙げ得ないが、書籍に構造の理論を考え、書籍発生以来の、その構造分析から試みたものである。

一　折本及び冊子の現存遺例

奈良時代の巻子が後世、折本に改装される例は無慮無数にのぼるが、管見によれば、奈良時代原装の折本は存在しない。折本の現存遺例は平安末まで降る。一方、冊子の最古の遺品は衆知の『三十帖冊子』（粘葉装）で、八〇六年に空海が唐より将来し現存している。七七〇年の『百万塔陀羅尼経』の印刷の事実からすれば、唐に於けるそれ以前の印刷術の発見が確実視され、印刷の発見が冊子を生んだとする筆者の仮説にも合う。恐らく八世紀後半に中国で冊子が発見され、空海の入唐期に流行を始めて居たものと考える。

二　正倉院文書中の折本

印刷術の発見とそれに続く冊子の発生期（日本に於いては概ね奈良時代）までは、未だ折本は発生していないとする論に対し、先ず予想される反論は『正倉院文書』中の「折本」の存在であろう。筆者にはそれは折本とは認め難いのであるが、『正倉院文書』に詳しい皆川完一氏は折本としている。[2] 件の「折本」とは、『続修三』所収の「大宝二年御野国加毛郡半布里戸籍」の白紙紙背を、七四八年に文書として再利用するに当って採られた形態（現在、同文書は表の記録に従い元の巻子に戻されている）で、同文書について詳しく述べられた土田直鎮氏の記述を左に紹介する。[3]

折目をずらして経師名を一覧し易くする工夫には、披閲の際、正規の折本や巻子の本に比して遙かに広い平面を要するといふ欠点がある。もし正規の折本の形が知らされてゐたならば、せっかく見出し紙を貼ってゐるのであるから、それに経師名を記すなり、それを更にずらして貼るなりして検索の便をはかり、やはり一紙の半分の面積ですむ型を採用したであろうと思はれる。（中略）折本といふものの姿を承知してゐなかった者によって事務の必要上、独自に為された考案であろう。もし折本の姿を熟知してゐたならば、あのやうな乱雑無雑作な折り方はしないであろう。

件の文書が「正規の折本」であるとはみていない土田氏の解説で同文書が折本とは認め難いことが大方理解されると思うが、筆者の立場から付け加えると、件の文書は形態上、文書の段階にとどまり、書籍としての構造[4]（の単位）がみられず、従って装幀し得なかったものと考える。敷衍すれば、件の文書は折り畳まれているにもかかわらず何故、折本で

この部分は本誌を御覧下さい

1図　『正倉院文書』中の「折本」モデルその一（大宝2年御野国戸籍紙背）

この部分は本誌を御覧下さい

2図　『正倉院文書』中の折本モデルその二(A)
付箋の所で巻物を折り返している。表紙に当っている所は紙背の御野国戸籍が見える。

この部分は本誌を御覧下さい

3図　『正倉院文書』中の折本モデルその二(B)
2図の表紙に当っている料紙を開けた状態

はないのであろうか、また折本ではないとして何故、折られたのであろうか、それは件の文書が経師名を挙げて、その各々に一、二年分の書き込み用空欄を設けて作成された文書であったと云う事情による。また乱雑でなく何故きちんと折らなかったのであろうか、それは既に在る行文から書籍の構造を発見することさえ当時は困難であったのに、まして（書き記す前の）白紙の折り畳みからでは、全丁を正確に同一寸法にすると云う発想は不可能であったと云うべきであろう。また料紙をして、ともあれ折る行為を容易にさせた理由は、件の文書が一度、廃棄された反故紙であったからであると推定する。

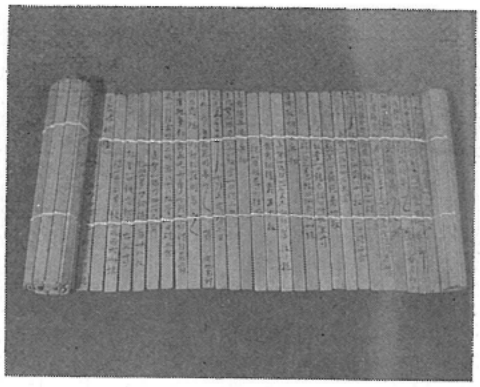
三　書籍の構造と装幀

前章で使われた書籍の構造とは、勿論、書籍を解体して表紙、タイトル紙、本文紙とすると云った物質的構成を云うのではない。冊子或いは折本を問題にして、書籍の四つの要素として文字、素材、構造、装幀が挙げられるが、書籍の装幀を問題にするに当ってその形態の核心を成す書籍の構造を考えてみたい。ついては饒舌のきらいがあるが文書及び書籍の発生から説き起こす。

書籍の前史として壁書、墓碑、銅器銘、朴占等の金石、亀甲文に始まる人類の記録は、言語並びに文字の歴史にも似て限りなく長く続いたものと考えられる。そして記録内容の量多くして書籍の前史を務めた系図、年代史、年表或いは暦等の発生に於いて、それを記す素材は各民族に於ける住居の建材とその風土との関係にも似て、その民族にとって何であれよかった。文書に続き、発生初期の書籍もまたその素材を選ばなかったが、木が比較的に多かった。樹皮（リベル）は仏語でリーベルとして書籍の意であり、英語のブックもブナの木で、その樹皮に文字を記したところから来たとされている。中国の簡牘も衆知の通り木竹である。

書籍の発生を促した、文書の最終発展段階の形態は、概ね一方向への連続展開が自然な巻き物の形になって到達していた。この意味で紀元前三千年、早くに存在したパピルス（巻き物）の西欧文明に於ける功績は計り知れない。まさしくガイウス・プリニウス（ローマの博物学者）が語った通り「パピルスの使用によって人類の不滅性が確立された」と云える。文書は巻いて書籍に到り、かくして巻子は書籍の最初の装幀となった。この点、西洋のコデックス（蠟版）は通常、デプチカ（二枚）と呼ばれ、トリプチカ（三枚）、ポリプチカ（三枚以上）までで呼称されることによって窺える様に、形態上、まだ文書の段階にとどまって居り、書籍の前史を務められず、それはパピルスに譲った。エジプトのパピルス『死者の書』は長くは四五メートルに達すると云う。

言語の線状性を映して古代書籍の本質に適う、その巻く形態は東洋では木簡、竹簡の連鎖及び帛書となった。文書は書籍とは異なり、形態上、物理的安定度を強いて要求されなかった（従って文書には装幀がない）。



4図　木簡レプリカ　木簡の構造の単位は断簡の一片にある。

この部分は本誌を御覧下さい

文書から書籍へのステップに当り、簡牘は書籍の条件として内容多く、かつその閉じられた形態が最小容積にして最大の物理的安定を要求されていた。竹簡はともかくとして、木簡の筆写に於いて二、三行或いは一尺平方の「方」その他が存在して何故、木簡は一簡一行を原則としたのであろうか。それは「方」が文字多く書き得て装幀する術を知らなかったからであると考える。コデックスの命名の事例に示されてる通り、量

多くして板は綴じ得ず、また継ぎ得ず、「方」は巻子或いは冊子の形態を先導するべくもなかった。同様の理由にして小アジアの粘土板もインドの貝多羅葉も古代文明を抱いたまま終焉せざるを得なかったと考える。木（竹）簡と云う物性として最少単位の連続を装幀して書籍の形態を発見したのが簡牘であった。即ち簡牘の構造の単位は木簡、竹簡の一片による行にあることが明らかになったと思う（日本に凡そ二十万点の木札が出土して一片の木簡＝断簡も存在しない所以でもある）。因に前漢末と推定される甘粛省武威の漢墳墓から出土した竹簡『儀礼』には、各簡の表裏に数字が振ってあり、あたかも今日のページの如きであったと云う。言語（文字）の線状性を行単位で折り返えす簡牘の形態、及びその簡牘を更に巻く装幀は素朴にして利用と保管を考えた書籍の理想的形態を示していたと云える。[5] この時以後、書籍は装幀の要諦として、順を追って丁（ページ）が固定され、かつ容易に丁を繰り得ること、その為にも素材の寸法、厚さ、材質等の書籍構造単位の法量が均一であることが決められた。[6]

紀元前後に紙が発見されて書籍はその素材を変えた。軸高を等しくし

5図　ロゼッタストーン　文書には書籍の構造がない。

て寸法異なる二枚以上の料紙をつなぐ最も素朴、自然な方法は接着材による固定であったが、巻いて納める形式や贅簡の存在、あるいは脱簡（落丁）、錯簡（乱丁）等の用語は簡牘の伝統を継ぎ、巻く形態も簡牘から来たものと考える。印刷本にして既に不必要と思われる匡郭、界線も簡牘の名残りと考えられる。紙本巻子に於ける書籍の構造単位を考えて、或いはその料紙を一見、考えがちであるが、巻くと云う装幀方法を改めなかったことに顕われて、印刷が発見されるまでは巻子の料紙は書籍の構造単位を担っていなかった。[7] 巻子の料紙が書籍の構造単位を構成していないことは次の条件からも確認できる。

一、現存書籍は巻子料紙の継ぎ目上にも文字が書かれている。

二、奈良時代に中国の絵巻をコピーしたと考えられる『絵因果経』の絵は、料紙の継ぎ目を全く避けていない。

三、古代の日本の絵巻には、書籍発生前の文書時代の名残りと考えられる異時同図、同図連続の描写法[8]が見られる。

四、右の三条件と重なるが、筆写時代にあった古代の書籍は必ず成巻してから筆写された。[9]

なお、印刷術発見の遙か以前から中国で行われていた採拓（拓本作製）と書籍の構造との関連を考えてみるに、採拓は一般に印刷術発見の遠因の一つに考えられているが、私見によれば印刷術発見との因果関係は薄く、また書籍の構造変革にも関与していないと考える。拓本は単位料紙で採拓されても、唐代まで、なおその料紙は巻子に装幀されて居り、印刷術発見前の拓本は冊子及び折本に装幀されることはなかったと推定する。

四　印刷の発見と書籍の構造

筆写時代の巻子にあっては書籍の構造を変えることは極めて困難であり、東洋では印刷術の発見をみて始めて冊子の形態（構造と装幀）が発見されたことを述べたい。

書籍の発達史上、その第一の変革を紙の発見とするならば、印刷術の発見は第二の変革と云える。また考え方に依っては人間が文字を発見したことに次ぐ文明史上の革命と云える。印刷の発見は同時に書籍の装幀史上に冊子の発見と云う空前絶後の革命をもたらした。書籍は古代にあって言語発声の線状性から、一方向への連続展開が自然な巻き物の形を採ったが、ここに印刷術の発見は書籍の装幀と構造に大きく関与し、言語の線状性に対し、書籍料紙の紙面に視覚、構造性を示唆した。即ち書籍は言語の線状性に従った、時間を軸とする限りない紙面に於ける行文の羅列を止めて、画面に入いる一杯に、行文をしてコラム（区欄）に一度に映した。印刷を発見した中国はその紙漉によって即座に冊子の映写幕を用意できたわけである。[10]

巻子に筆写される場合とは異なり、印刷が発見されてからの書籍は版

この部分は本誌を御覧下さい

6図　巻子と折本の構造の違い

巻子の構造の単位は各1行にあるが，折本のそれは掲載書籍（上段折本版本）の例では1折6行とし，その前後を僅かに空けている。

に合わせて必然的に料紙が同一の規格、寸法に整えられたと云うことに注目したい。雕版も選んで必ず同一寸法の版木を揃える筈である。即ちこの印刷術発見がもたらした変革は、巻子時代とそれ以後との大きな違いとして、印刷によって書籍料紙の単位即ち丁数（ページ）が発見されたことにある。巻子には料紙の単位（ページ）が存在しなかった。料紙を考えて、巻子は線状的に展開する一方的な流れに意味があり、料紙の均一な長さ、単位を全く必要としなかったが、版木に於ける料紙は当然、白紙が成巻（製本）されるのではない、既に記（印刷）されている同一寸法の序列の決まった単葉（版木料紙には必ず序列、丁数が付けられている）を前にして、各単葉の糊継ぎに工夫が起きるのは自然な勢いではないだろうか。専ら定型化された料紙を前にして、依然として成巻の形式を守株するだろうか、巻子に仕立ててその長さを競わないとしたら、そこで同一の寸法をして料紙に料紙を継ぐことを止めたのではないだろうか、印刷によって書籍の均一なコラムが発見されて書籍は構造を変えたと推定する。逆に云えば、書籍に新らたな構造が示唆されなければ書籍はその構造を変える機を得ず、新しい装幀も発見し得ないと考える。

以上、印刷術の発見を通して書籍の構造変革を捉えたが、なお書籍の構造及び装幀に関する冊子と印刷の相関関係を示唆して次の傍証を挙げる。

一、印刷が発見されて以後、中国では印刷時代を迎えて巻子が絶えたこ

7図　三体石経（三世紀）一面34行で各行は60字であった。

この部分は本誌を御覧下さい

と。

一、右に対し、日本では印刷が伝えられて、なお印刷時代を迎え得ず、依然として筆写時代を続けてまた巻子は止まなかったこと。

一、中国に於いて同じく石経として存在しながら、巻子時代の石経にはコラムがなく、巻子の構造しかみられないのに対し、印刷術発見後に刻まれた石経には冊子の構造が映されてコラムがあること。(11)

一、冊子時代に入ってのち印刷が伝えられた西洋では印刷された巻子がないこと。

一、巻子の形態を知ろうとしなかった印度の貝多羅葉は、印刷が伝えられてなお、依然として同装幀に印刷して書籍の構造（及び装幀）を変えなかったこと。

8図　開成石経（九世紀）八段のコラムが見える。

この部分は本誌を御覧下さい

書籍の構造変革の問題に折本を考えるに、もし巻子から直接、折本が発見されたとするならば、折本として料紙を折る前に巻子の行文から行・以外の構造単位を発見しなければならない。折本は冊子に拠らずして何を契機にコラムの発見が可能であったであろうか。古代中国の巻子書籍にあっては、同じく象形文字にしてパピルスに書かれたヒエログリフの例に見る如く、コラムの発見は困難であったと考える。

五　書籍の成巻（製本）事情からみた冊子の発生

蝴蝶装は東洋に於ける最初の冊子装幀で、それは一枚単位の版木による整版印刷によって発見された装幀であると考えるが、書籍の成巻事情からそのことを考え合わせたい。

印刷がもたらした、それまでの書籍の書写に関わる装幀史上の変革は、書籍が成巻、紙継ぎされてから筆写されるのではなく、必ず印刷が先で、成巻、紙継ぎがあとになったことである。この逆転が重要で、それは東洋に於ける冊子発生の必須条件であった。理論上、書籍は成巻されてから筆写された筈であり、古代の巻子を始めとし、筆写時代の書籍が製本されてから筆写されることは多くの事実が証明し、また粘葉装や綴葉装に於ける書写の事情を考慮すればそのことは頷かれると思う（簡牘も編んでから、パピルスも成巻されてから筆写されて居る）。これに対し、印刷本は当然にして如何なる装幀にあっても必ず印刷されてのち製本される。

定説では折本発生の根拠、理由付けに巻子の利用に当っての不便が挙げられているが、既存巻子の折本化、改装の場合を除き、原装幀としての折本の発生状況を考えるに、書籍発生後まもない古代の書籍は、読むために先ずあったのではなく、先ず書くためにあったことに注目したい。その時代、印刷が発見されるまでは書籍を読むこととはそれを書くことであった。四世紀に洛陽の紙価を高めたのもその例である。この書くためとは、読む便宜を先廻りして考える必要のないことを示唆している。即ち折本を考えて、書籍は先ず巻き物として筆写し終えてから折り畳んで折本としたわけではない筈である。製本論上、折ることを前提として筆写（もしくは印刷）しなければならない筈である。折ることを前提とするとは、この場合、筆写することは難点があり（折り畳んで書くと仮定し）、印刷した可能性が高い。即ち折本は形態論上、印刷時代に入ってからではないと発生し難いと推定する。因に冊子時代に入ってから印刷が伝えられた西洋には印刷された巻子が発生しない。

六　書籍の素材からみた冊子の発生

書籍（巻子）の冊子化には素材上、料紙の折りが必須条件である。冊子発生以来、書籍料紙の折りは書籍の生命であった。折らず、即ち見開きに単葉を二枚配することは今日の無線綴ならいざ知らず、装幀史上、考え得ない。[12] パピルスが終いに冊子を発見し得なかった理由も、それを折り得なかったからであった（中国が折ること可能な紙を発見して、なお、冊子の発見が困難であったのは、表意文字を料紙にタテ書きして敷き詰めてコラムを発見し得ず、書籍の構造を変え得なかったからであると考える）。

なお、古代に於ける料紙に対する一般論として、いまだ反故紙になっていない未使用の料紙を折ることには大きな抵抗があった筈で、白紙の料紙を筆写する前に折ることは、反故紙（紙背は白紙）を棄て去ることがなかった様に有り得なかったと考えたい。

注

（1）印刷が発見された中国に於てこそ冊子が発見された装幀として蝴蝶装が意義を持つ。日本では同装幀は行われず、粘葉装に改変された。蝴蝶、粘葉両装の違いについて日本では認識がないが、装幀史の重要な問題として今後、研究されるべきだと考える。

（2）吉川弘文館『国史大辞典』正倉院文書の項。

（3）土田直鎮「千部法華経料紙筆墨充帳の形態」（『続日本古代史論集』所収）

（4）文書と異なり書籍には巻頭から起筆して巻末に収束する文（字）の流れを同一単位で区切る構造が存在する。

（5）巻く形態は日常的な知恵として、今日の我々も糸やロープの保管と利用に応用している。

（6）この装幀の定義に従えば、粘土板、コデックス及び見多羅葉は書籍から外れる。

（7）原本または親本を忠実にコピーする場合等を除き、書籍の料紙の寸法は多種である。例えば、日本最古の現存書籍である聖徳太子筆『法華義疏』の第一巻の料紙寸法は次の通りである。一六寸（三枚）、一五寸（八）、一四寸（四）、一三寸（三）、一二寸（三）、一一寸（七）、一〇寸（二）、八寸（四）、六寸（一）、二寸（二）、以上、吉川弘館出版『法華義疏』（コロタイプ複製）の解説より。

（8）法隆寺蔵『玉虫厨子』の捨身飼虎図、『伴大納言絵巻』の陰謀発覚の発端になる子供の喧嘩の場面。なお、日本の絵巻にある絵と詞書が交互に記されて、料紙に依る巻子の構造化を示すかに見える形態があるが、これは冊子発生後のものである。冊子発生前の絵巻は絵と文字が『絵因果経』の如く上下に分れるか、或いは中国の変文に見られる如く詞が紙背に分離される形態を採ったと考えられる。

（9）勿論、形式的には二通以上の文書を保存するために継いで成巻する様に、書籍の料紙も筆写してから成巻することは可能であるが。

（10）トルファン出土の晋代の紙＝「地主生活図」は紙に描かれた最古の絵とされるが、一〇六×四七センチにしてほぼ同一寸法の六紙で継いでいる。即ち一紙は凡そ三六×二四センチとなり、手漉紙の寸法であったと考えられる。

（11）筆写時代の石経に於ける構造は「行」であり、石碑刻面が果てるまで一行は続いて区欄（コラム）は作られない。

（12）『正倉院文書』中には多数の単葉を重ね、左端の天地を（糸で）綴じたと思われる事例が存在するが、装幀の定義に照らして書籍とは認め難い。